

日本イェナプラン教育協会



ニュースレター Vol.5 2011. 3月号

発行元：日本イェナプラン教育協会

編集：田村 悠子

住所：〒155-0033

東京都世田谷区代田6-3-22-202

TEL：070-5559-0361 FAX：03-3466-3439

HP：<http://www.japanjenaplan.org/>

mail：Info@japanjenaplan.org

3月11日、大地震と大津波により多くの方が被災されました。亡くなられた方、被害を受けられた方々に謹んでお見舞い申し上げますと共に、一刻も早い復旧を心よりお祈り申し上げます。

震災から2週間が経ち、各方面で各自が復興のために立ちあがっていますが、私達も“教育”という面で何かできる事があると思っております。被災し、学校に通えなくなっている子ども達が大勢います。彼らが心から笑う日が1日でも早く訪れる事を願い、日本イェナプラン教育協会も今できる事を頑張っていきたいと思っております。皆で連携し、日本再生のため『希望』を持って頑張っていきましょう！

第5回

人は誰でも話したいし、聞かれない

協会代表 リヒテルズ直子

人類が、他の生き物と異なる大きな特徴の一つ、それは、自分の頭の中に浮かんだことや心に感じていることを「言葉」にして現すことができるということでしょう。小鳥たちのさえずりのように、他の動物も、声を出してコミュニケーションをとっていますが、頭に浮かぶことを整理したり、見直したり、本やインターネットの情報を受け止め、自分の言葉に直して話したり、ということは、あれほど喧しくさえずる小鳥たちでもしないことですよね。

多分、人間には、そういう能力が生まれつきビルトインされていて、本能的にも、この能力を使いたい、という欲求が生まれるように出来ているのではないのでしょうか。また、同時に、小鳥たちのさえずりでも分かるように、言葉は、それを発する側があると同時に、受け止める側があって初めて成り立つものです。言葉や文章は誰かそれを受け止めてくれる人、読んでくれる人があることを想定して言われたり、書かれたりするものです。

「ええ、でも日記やブログはどうなの？」
と言われるかもしれません。自分自身を聴き手・読み手にするコミュニケーションもあると思います。つまり、自分自身を外から他人になって眺めるつもりでやる行為です。自分を外から見直す行為を、メタ認知といいます。これは、人間の知的行為の中でも大変重要なものです。

けれども、頭に浮かぶことや心の中に感じている喜怒哀楽の感情を、言葉に置き換えるという能力は、練習をしなければ育ちません。そしてそれはかなり小さな子どもの頃から出来る練習であり、小さい時に始めていければいほど、ものごとをよく科学的・客観的に捉えられる人間に育っていきます。

さて、旧来の国語の勉強について少し考えてみてください。

まず、平仮名や片仮名を覚える、それから、毎年少

しずつ漢字を覚える、教科書の文章を読む、読解力や文法の力を身につける、作文や作詞などに取り組む、...

どれも、コミュニケーションの「道具」となるスキルを身につけるための大切な基礎です。でも、コミュニケーションそのものの練習は、同時にどれくらい行われているのでしょうか。

学校という場は、子どもが小さければ小さいほど、目新しいことが色々起こる、刺激に満ちた場所であるはずですが。そこで起こることは、家庭とは違って、気持ちの良いことばかりではないかもしれません。毎日、友達や先生の行為を見たり、新しいことを学んだりしながら、子どもたちの心には色々な感情がわき、頭の中で、ああでもない、こうでもないと考えが浮かんでいるはずなのです。人間である以上、そうなるようにビルトインされて生まれてきているのです。

だったら、せっかく学んでいる読み・書き・文法のスキルを使って、子どもたちが自分の考えや気持ちを率直に表してみる場所を、なぜ、もっと用意しないのでしょうか。

気持ちや考えを言葉に現すという行為は、文字や文法を知っているというだけではできないことです。何回も繰り返し、しかも、受け手、つまり聞き手や読み手からの反応があって、それを聞いて言い直したり書き直したりするうちに上手になっていくものです。



Photo:リヒテルズ直子



サークルで指導を受ける子どもたちと
グループの席で自習する子どもたち

Photo:ヒテルズ直子

今号から4回にわたってシリーズでお届けするのは「サークル対話」についての記事です。「サークル対話」は、コミュニケーションの練習の場としてとても大切な役割を果たします。それは、子どもが他の人に「言葉に耳を傾けてもらえる場」であり「他の仲間に真面目に耳を傾ける場」です。

自分以外の子どもは、自分とは違います。また、周りにいる一人ひとりの子は、みんなそれぞれ、違う家庭に育ち、違う性格を持ち、違うことに興味を持ち、違うことが得意だったり不得意だったりします。大人としての先生も大切ですが、同世代として、これからの人生を一緒に生きて行く友人としてもとても大切な仲間です。違うから、大切なのです。自分の意見に、

「そうかなあ、こういうふうには考えられないかなあ」
「そういう時にはこんなふうには解決できるよ」
「僕はお父さんからこう教わったよ」
「こんな本があって、そこにはこんなことが書いてあったよ」
「僕もやってみたいから、一緒にやらせてくれないかなあ」

そういうふうに対応してくれることで、子どもは、自分がたった一人で生きているのではない、ということを知ることができるのです。

コミュニケーションというのは、実は、一人ひとりの人間が一人ではないということの確認の手続きなのではないでしょうか。もしも、言葉や文章が、

「オレは一人でこんなに上手くやれるんだ」

というものばかりだったら、うんざりして誰も読みたくなくなるでしょう。言葉や文章は、聞かれ、読まれることを待っているのです。

本当は、小さな子どもが、あーあーとかうーうーという声を上げ始める時から、一体それは何を言おうとしているのだろう、と考え受け止めてくれる人が必要なのだと思います。そうでなければ、子どもは、本当に人間の子どもにならない！！

でも、今、生活することだけで窮々としていて、子どもの声を満足に受け止められない親たちがどれほどいることか、、、。保育園や学校は、子どもの声を誰かが受け止める場にならないといけないのではないのでしょうか。そして、保育さんと先生が、それを一手に引き受けるなどという大変なことになる必要は全然ない。みんながみんな受け止めればいいのです。サークル対話の場はそのためにあります。

そして、そういう場を、機会があったら保護者にも見せてほしい。保護者も多分、みんな声を聞かなくて仕方が無いのです。モンスターペアレントなどという、醜い言葉で呼ばれるような事態になる前に、保護者が参加できるサークル対話の場を作ってみたらどうでしょう。話し、聞く、という場を学校で与えられず、言葉を介してコミュニケーションする練習をしたことがなかった親たちにも、サークル対話は必要です。

ピーター・センゲが提唱した「5つの原則」に基づいて、学校の改革に取り組んでいる人たちが「学ぶ学校(School That Learns)」という本を書いています。その中に書かれていることは、一つ一つイェナプラン教育に通じるものが多く、オランダのイェナプラン関係者もよく参照している本です。

その中に、「チェックイン」というアイデアが書かれています。授業の始め、特に、朝の最初の授業でちょうどホテルにチェックインするときのように、教室に入ってくる子どもが、何かちょっと言える場所を作るとクラスの雰囲気ガラリと変わるよ、と言っています。

毎日やる余裕はないかもしれないし、長々とやると疲れてしまう。ほんのちょっと、みんなでサークルになって、言いたいことをいう場を作っておくといい、と。月曜日と金曜日だけやってもいい。そうすると、クラスにけじめが生まれる、と言います。一言だけでもいい、と。

例えば、「真っ白」「野球」「眠気」「運動会」、、、、という風に、一人ひとり心に浮かぶ言葉を一語だけ伝えて一巡する、というのです。

「チェックイン」の時に、何も言うことがない、何も言いたくない、という子もいるかもしれない。そういう子には、強制しないこと、「パス」と行って次の子に回すのがいい、と言っています。ただ、「パス」という言葉は、クラスのみんが聞こえるようにきちんと言うこと、としています。何も言うことはない、でも、それを言える。それは、自立した大人らしい行為です。

「おとなしい」のではなく「大人らしい」子どもを育てましょうね。そして「おとなしい」のではなく「大人らしい」市民に、私たちが進んでなりましょう。

シリーズ ～サークル対話～



今号から【シリーズ～サークル対話～】を4回に分けて皆さまにお届け致します。どうぞ、ご自分の実践などと照らし合わせて、お読みください。日本でサークル対話を広め、盛り上げていくヒントがいっぱいです！

サークル対話の進め方

リヒテルズ直子

この手引きは、サークル対話を進めるときの注意事項として、主に下記の参考資料をもとに記述したものです。筆者が日本の状況に照らして必要に応じて補足的な説明を施しています。ニュースレターでは4回に分けて、サークル対話についてシリーズをお届けします。

5回目(7月)号では、皆さんそれぞれの実践や経験(成功例や失敗談)をご照会ください。

- 1回目(3月):サークル対話をなぜするのか
- 2回目(4月):サークル対話にはどんなものがあるか
- 3回目(5月):サークル対話をうまく進めるための知恵と工夫
- 4回目(6月):サークル対話がうまくいかないのはどんな時?
- 5回目(7月):会員参加:サークル対話をやってみたら、、、?

参考資料(1～4回):

K.Both, "Jenaplan, Jenaplanonderwijs op weg naar de 21e eeuw", Nederlandse Jenaplan vereniging(NJPV), 1(ケース・ポット「イエナプラン、21世紀に向かうイエナプラン教育」オランダイエナプラン教育協会(NJPV))

Ad W.Boes, "Gesprekken in de kring", Christelijk pedagogisch studiecentrum(CPS), ISBN 9065083049, pp.17-36

(アド・W・ブース「サークルの中での対話」キリスト教教育研究センター)

シリーズ第1回 【サークル対話をなぜするのか】

◆イエナプランスクールでは、、、◆

対話をする時には、**どの参加者もみな平等な立場**で互いに発言する。

お互いの**知識を豊かに**したり、**みんなで意見を形成**したり、**みんなで何かを決定**するために話し合いをする。

サークル対話には、**テーマサークル**、**観察サークル**、**読みサークル**、**企画サークル**のほか、自由にテーマを持ち寄れる**オープンサークル**がある。

サークル対話は、**目的**、**ルール**、**役割**を明らかにすることで、その進行を順調に進めていくための**枠組み**と**配慮**がつけられる。

サークル対話は、参加者が属している**〈ファミリー・グループ(根幹グループ=クラスルーム)〉**が作る**文化**を映し出す鏡としての役割を果たす。

◆直接的な目的◆

1.知識を豊かにする

旧来の一斉授業形式のクラスルームでは、「知っているもの(knower)」が「知らないもの(not-knower)」に知識を伝達する、という<伝達型教育>の考え方によっていました。

でもイエナプランでは、教員も子どもたちも、「生きている限り学び続ける存在」と考えます。

サークル対話の形式は、knower対not-knowerという対立的・対面的な関係を崩し、グループリーダー(担任教員)も含め、すべての参加者が平等の立場でサークルを作り発言をする機会を与えます。それにより、どの参加者も、自分の関心や適性、経験を通して、他の人の知識を豊かにすることができます。

それぞれの子どもの持っているユニークさが引き出され、対話を通して、ユニークさの価値をお互いに認め合えるようになります。

2.意見を交換し、さらに発展させる

私たちが生きている社会の中には、同時にいろいろな価値観が共存しています。サークルの参加者は、どの人も、自分自身の価値観を代表してサークルに加わっています。立場や(文化的)背景の異なる参加

者が、対等な立場で参加する場で、参加者はお互いの意見をもっと正確ではっきりしたものにするのを助けたり、他の意見に照らしてフィードバックしたり、一緒に、より深い意見を創っていくことを学びます。

教員や大人たちの意見や知識を、自分の頭で考えたり経験に照らしてみるなどしてみることをせず、単に無批判に受け取る(受動)のではなく、自分で他の人の意見によく耳を傾けながら、自分自身はどう思うかと考え直し、そういう作業を通して、自分にとっての真理は何なのか、を発見したり、見直したりする、という(能動的な)態度を養います。

他の参加者の意見を聞いてみると、自分の見方は異なる、他の見方も可能なのだ、ということがわかります。

3.参加者が共に決定する

みんなで一緒に協力して物事を決めるというのは、リーダー(教員)が決定したことをみんなで実施するというものではありません。サークル対話を通して、参加者が共に何かを決定するという経験を通して、子どもたち(や私たち)は、参加者が一人ひとり自律的で主体的であると同時に、集団としての共同の目的を意識しながら協力するという意識を育みます。「私たちは何をしたいのだろうか?(グループとして、クラスとして、学校共同体として、地域として、広域にわたる集団として、市民として、国民として、世界市民として、、、)」

4.個々の子どもの発達を促す

教員から「教えられる」というだけではなく、仲間の一人ひとりから、ユニークで異なる刺激を受けることで、子どもの様々の面が引き出され、それによって発達が促されます。

5.共同でグループの発達を促す

それぞれの子どもが、とてもたくさんの相互の交換的な作用(会話)を通じて学べると同時に、それを集団の決定や意見形成に結びつけることによって、グループ自体が、協働的な能力をもつ集団として発達していきます。

◆長期的な目的◆

- ・子どもが物事に対して意識的に関わり、色々な異なる情報に対して自分自身で自分の頭を通して考えてみる態度、他の人が教えてくれたこと・気づかせてくれたことに対して喜んで受け入れる態度が養われます。
- ・子どもの自己肯定感・自分への信頼(自分自身に対するポジティブなイメージ)が高まります。
- ・自分の考えを他の人が理解できるように言葉にして表すことにより、社会性とコミュニケーションの力が養われます。



Photo:リヒテルズ直子

日本のスーパーティーチャーと イエナプラン教育

京都教育大学 教授 村上忠幸

日本で優秀とされる先生の多くはスーパーティーチャー症候群に陥っていると思われる。もちろんこれは私が命名した症状であり、決して一般にそのような呼び名の症例があるわけではない。ただ、私の知っているスーパーティーチャーの多くはこの症状を有している。このようなことに気付かされたのは、イエナプランの教師と子どものアクティビティを示した座標軸を見たときである。リヒテルズさんもこれを示して日本のスーパーティーチャーが4分割した右下に位置していると説明される。つまり、教員のアクティビティは高いが子どもは受け身で、しかもコントロールされて

いるということである。

子どもが探究的に自ら学ぶ姿をイメージした時、日本の先生方がもっとも念頭において大事にしていることは、子どもを手ひらのコントロールしたいということである。探究学習につながる主体性、関心・意欲などという言葉は、学習指導要領にも至る所に散りばめられている。また、私たち教育関係の大学教員もこれらの言葉を枕詞のごとく繰り返している。私が日頃目にするいい授業とは、先生がほとんど指示しないのに、子ども達が指示されたかのように動くという妙なものである。これこそが子ども達が自分で考え、自分で行動するという教育の成果を具現化した姿なのである。

私もこのような勝手なことを書いているが、実はかつて、そのような教育の姿をすばらしいと思ってきた一人でもある。探究学習の研究を本格化させた

2003年頃は、このような主体的な子ども達の動きを支えている目に見えないコントロール性に気付かずに、日本的なスーパーティーチャーこそが素晴らしいと思っていた。ただ、そのような呪縛に容易にはまってしまう環境が日本の教育にあることにも気付いてきた。

日本の教育にあるコントロール主義という呪縛はなかなか見えない。イエナプランに接して以来、遠近法のこちら側にある日本の教育の姿がなかなか見えてこなかった。課題は見えていたが、それを語れなかった。果たしてここ1年ほど、自分の周りであったいくつかの出来事がきっかけとなり、日本の教育の姿が少し見えはじめた。それが先に述べたようなこと、すなわちスーパーティーチャーの日本の子ども中心主義にあるコントロール性という呪縛の発見だったのである。イエナプランに接して6年目のことであった。

昨年の日本イエナプラン協会の講演で、日本のスーパーティーチャーをオランダに連れて行くと発熱するという話をしたことがある。日本的には、教育は教師の経験性に根ざす実践的な営みである。どうやらイエナプラン教育の風景は日本の私たちの視野の外にあるようだ。

イエナプランに接したとき、視野を広げることのできた人は発熱から立ち直り成長することができるが、視野を閉ざした人にとっては自分を否定されているような不快な経験にすぎないようである。すなわち後者こそがスーパーティーチャー症候群の典型的な症状なのである。



イエナプラン校で主体的に学ぶ子ども達

Photo:リヒテルズ直子

—リヒテルズ直子の 質問箱—



高校講師Tさん
埼玉県

Q1: オランダの教育の様子を紹介した番組「プラネットベイビーズ」を見て、イエナプラン校で移民問題やいじめの問題など、保護者が様々な事をオープンに話し合う様子を改めて感銘を受けました。保護者同士がクラスの問題などについて議論する機会には頻繁にあるのですか？ また、それはどのような場面で設定されているのですか？

A:リヒテルズ直子より

プラネットベイビーズでは、移民が特に集中したアムステルダム校を取り上げていましたので、必ずしも、普通の一般的なイエナプランの状況ではなかったかもしれません。

一般的に、オランダの学校は、教員と保護者とが一体になって子どもたちの教育に関わることを重視します。そのために、教育監督局の学校監査にも、保護者参加の実態を調べたり、保護者が学校に対してどういう気持ちでいるかインタビューをしたりする項目が含まれています。もと、オランダの学校は、親が選んで決めるものですから、その意味で、学校に対して好感度が高い、それが出発点になっているということもあります。

オランダの学校での保護者の参加は、①クラスや学校での教育活動への協力(パーティ、見学、キャンプなどでの協力、テーマ学習や催し物の際の教材づくりや衣装作り)②学校の運営に対して意見を述べるための「経営参加委員会」への参加(教員代表と保護者代表とが5割

(次ページに続きます。)



ただ、プラネットベイビーズにもあったように、そういうオランダの学校の習慣を知らない、また、自国で経験のない移民たちの間には、学校活動への参加に消極的な親たちも多く、これが、学校経営者を逆に悩ませているのです。つまり、教育を学校に任せっぱなしにされると、子どもにとって、一貫性のある大人たちの環境を作ることができない、と考えるのです。そのため、移民の多い地域の学校には、市が特別資金を支給し、学校の方から、積極的に保護者を招いて、保護者に学校参加の機会を作るように奨励しています。

イエナプラン校は、こういう保護者と教員の協力による、子どもたちのミクロな世界作りということでも、昔から率先して取り組んできたという歴史があります。

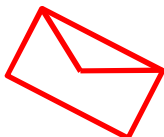
そんな中で、お母さんモーニングをしたり、何か教材づくりを媒介にして保護者が学校での教育活動に参加する機会などが作られています。(拙著「オランダの共生教育」に詳細)

日本にも来たことのあるリンさんのイエナプラン校(2010年の最優秀イエナプラン校に選ばれた)では、学校での活動に参加したいと思っている保護者のために、小さなカラフルなブックレットを作り、色々なアイデアを提供して、保護者の方からいつでも参加したいと言えるようなオープンな姿勢を示すようにしています。その中には、教材作り、パン焼きなどの料理、工作などでの協力、ワールドオリエンテーションの際のテーマ学習の際の協力、遠足や見学での協力、図書の整理、教室の装飾の手伝いなどが含まれます。

金曜日午後の週の終りのミニ学芸会には、全校生徒と共にたくさんの保護者が参加するのが普通です。30分程度の時間ですから、その日だけいつもより早く子どもたちを迎えに来て、学芸会を見ていくことができます。

これも「オランダの共生教育」に書きましたが、現在シチズンシップ教育として急速に普及している「ピースフルスクール・プログラム」でも、このプログラムを導入する際、2年目の研修期間に、学校の先生たちが、保護者を学校に招いて、子どもたちにやるのと同じピースフルスクール・プログラムの授業をし、それについての意見交換をするという日程が組み込まれています。ピースフルスクール・プログラムは10年の経験を経た後、現在、ピースフルスクール・コミュニティという名で、コミュニティを巻き込むプログラムに発展しています。つまり、学校周辺の地域にある、種々の公共施設、図書館、児童施設、スーパーマーケットなど、公共性が高く子ども達が直接に接する機会のある機関の人々を集め、シチズンシップ教育の意図を大人たちが共有して、一貫性の高い環境づくりに取り組むという試みです。

これは、コミュニティが学校に介入するという意味のものではなく、学校を基礎にして、未来を生きる子ども達のために少しでも「理想」に近い民主的な市民社会を学校に生み出し、それをコミュニティの人々に共有してもらおう、という考えに立つものです。こういう考え方は、イエナプランのコンセプトであると同時に、現在、アメリカのピーター・センゲらが取り組んでいる試み(School that learns)とも通じるものが非常に多く、私はここに、学校から始まる社会変革の可能性、学校が有無、世界規模の市民社会づくりの可能性を見出しています。



イエナプラン教育に関するご質問を募集しております。
下記のメールアドレスまで、お気軽にご連絡ください！
info@japanjenaplan.org



★みなさまの【サークル対話実践談】を募集します。

イエナプラン教育で行われているサークル対話。日本でも教育の場や会社、熟議の場などで少しずつ広まってきました。そこで、今月から皆さまのサークル対話実践談を募集致します！

『こんな場でやってみたら良かった。』『やってみただけど、中々上手いはず難しかった。』など、サークル対話をやってみた感想や質問などもお待ちしております。

また、みなさまの実践はニュースレター6月号でご紹介させて頂く予定です。

この機会に日本での実践に関する情報や知識を共有し、会員のみなさまとサークル対話を日本でもっともっと広げていければうれしいです。

実践談やご質問をお送り頂く際は、「サークル対話実践談」とお書きの上 info@japanjenaplan.org までお送り下さい。紙面の都合上、頂いたご報告やご質問をこちらで編集することがあることをご了承下さい。皆さまからのご報告をお待ちしております。

★ニュースレターへのご意見ご感想をお待ちしております。

無事、第5号まで発行することができました。ありがとうございました！

より良いニュースレターの制作のためにも、みなさまのご意見ご感想をinfo@japanjenaplan.org までお寄せ下さい。心よりお待ちしております。



★各支部のご案内

東京支部 info@japanjenaplan.org

千葉支部 chiba@japanjenaplan.org

埼玉支部 saitama@japanjenaplan.org

京都支部 kyoto@japanjenaplan.org

福岡支部 fukuoka@japanjenaplan.org

★ニュースレター3月号はいかがでしたでしょうか？

5月には当協会代表のヒテルズ直子氏が帰国されます。東京などで講演などを開催する予定ですので、帰国日程や講演会などの詳細が決まり次第、改めまして皆さまにご連絡させて頂きたいと思います。

春は出会いの季節です。皆さまと一緒に、イエナプラン教育に関心を持っている方々がと新たに繋がっていけるネットワーク作りをしていきたいと思っております。

編集(田村)